

物象化論と論理絶対主義批判 ——アドルノの現象学研究を手がかりとして——

Reification theory and Critique of Logical Absolutism
—Themes in Adorno's phenomenological studies

青柳 雅文*

はじめに

本稿は、Th・W・アドルノの論理絶対主義批判を、彼の物象化論という観点から考察するとともに、この考察をつうじて、彼の物象化論の一側面について浮き彫りにすることを目的とする。彼やフランクフルト学派における物象化論については、すでにさまざまな研究で俎上に上がっている。本稿はそれを彼の現象学研究との関連において考察するものである。これによって、さらにアドルノの現象学研究や〈非同一的なもの〉の思想についても、その全体像を知る契機がもたらされることになる。

本稿では、アドルノの現象学研究に関する主著『認識論のメタ批判 フッサールと現象学的アンチノミーにかんする諸研究』（1956年）から、第一章「論理絶対主義への批判」が中心的に取り上げられる。これは刊行に先立つ1953年に執筆され、翌年の『哲学論叢』誌に掲載されたものにもとづいている¹⁾。また執筆に際して、草稿にはアドルノ自身によって「フッサールと論理学の物化 Husserl und Verdinglichung der Logik」という表題が与えられていた²⁾。このことから、本稿の主題である物象化論と論理絶対主義批判との結びつきが示唆されるであろう。

* 立命館大学文学部非常勤講師

以下では、まずアドルノの物象化論から提起される諸問題を確認した上で、論理絶対主義批判をめぐって、彼の物象化論の観点から考察する。さらにこの批判について、同一性と非同一性という観点から検討を加えることとする。

1. アドルノの物象化論における諸問題

ここでは、アドルノの物象化論³⁾にどのような問題が含まれているか、予備的に考察しておきたい。彼においては、「物化 Verdinglichung」、「物神崇拜 Fetischismus」、「疎外 Entfremdung」がたがいに関係づけられている⁴⁾。「物化」や「物象化」などと訳される言葉には、Verdinglichung と Versachlichung のあることが知られている。(本稿では Verdinglichung の日本語訳として「物化」を用い、Versachlichung からは区別しておく。) アドルノは多くの場合 Verdinglichung を用いており、Versachlichung を用いる事例はきわめて少ない。では、彼は物化をどのような意味内容で使っているのだろうか。ここでは彼の哲学的名著『否定弁証法』(1966年)を引き合いに出しておきたい。彼はこの作品において、哲学的主観主義に対抗する客観性が物性 Dinghaftigkeit を持つと理解している。この物性とは、物が主観的でなくまさに客観的な物であることを意味する。そしてその際「哲学は、この物性を相対化あるいは流動化することによって、商品の優勢な力を克服し、その主観的反省形式である物化された意識を克服できると信じている」(GS6. 190)と述べて、物性を持つことを物化されたと呼んでいる。さらにその後の箇所では、彼は、物化を思考の「商品的性格」(GS6. 191)、「偽りの客観性の反省形態」(ebd.)とも呼んでいる。また同じ箇所では、商品だけでなく他律や異質的なものを物的なもの、客観的なものとみなし、主観と対置させている。これらのことから物化とは、たんに何らかの物性を持ったものになるというだけでなく、主観や意識から対象化されて対置しているという事態を指している

ことがわかる。

ところでアドルノは、『否定弁証法』の同じ箇所、物化と関係づけながら「物神崇拜」と「疎外」という言葉も用いている。たとえば彼によれば、「客観の優位といえども、世界の物性は仮象でもある」(GS6. 190)とされ、それが「諸主観の所産の社会的関係を物自体に帰するように、諸主観を惑わしている」(ebd.)。こうした事態について、彼はK・マルクスを引き合いに出しながら、「商品の物神的性格は、主観の誤った意識のせいにするのではなく、社会的アプリオリから、つまり交換過程から客観的に演繹されている」(ebd.)と述べている。アドルノは物神崇拜について、主観に起源を持つものを客観に由来するものだと欺く意味で用いていると考える。また疎外についてアドルノは、「物化と結びついた疎外、つまり物化に対応する主観的な意識状態」(GS6. 191)と定義している。彼において疎外は、物化という事態における主観的意識の側の状態、物化によって生じる対抗関係がそのまま放置されている状態のことである。つまり彼は疎外を、物化によって生じた帰結のひとつとして理解するのである。

以上のように、アドルノは物化、物神崇拜、疎外をたがいに関係づけながら用いている。本稿ではこれらの言葉を彼の一体的な問題関心に含まれるとみなし、これを物象化論と呼ぶこととする⁵⁾。ところでこうした彼の見解には、(彼独自ではないにせよ)ひとつの特徴的な点がある。それは彼が物的なものを、物自体や物性との結びつきにおいて論じていることである。たとえば物自体という表現は、I・カントの物自体概念のように、物が何らかの即自存在、経験から独立した超越的存在だという意味を含んでいる。またそこには認識主体との間の距離が示唆されている。もちろんアドルノは、素朴に実在する主観と客観の二元論を主張しているわけではないが、物的なものや対象的なものに超越性を含意させており、このような観点と枠組みから、物象化論の問題を考えようとしているのである。そしてこのことが以下で考察する彼の現象学理解にも影響している点にも注意が必要であろう。

2. 論理絶対主義と物象化論

アドルノの現象学研究において論理的な問題が扱われるのは、彼の亡命期間以降のことである⁶⁾。彼の探究は、そこに物象化論という観点を導入している点にひとつの特徴がある。以下では、彼の提起する問題関心を確認しながら、論理絶対主義批判について考察する。

2-1 アドルノの問題提起

まずアドルノは、E・フッサールの現象学の試みを「哲学的省察をつうじて物化の呪縛を打破すること、そして現象学者たちが好んで言ったように、「原的に与える直観」において「事象そのもの」を「掌握する in den Griff bekommen」こと」(GS5. 54-55)だと位置づける。アドルノは現象学を、意識において事象そのものを直接的にとらえる立場として理解している。このようにとらえる試みは、彼からすれば、対象としての物的なものを思考の中で内在的にとらえることである。これによって現象学は、意識一元論的認識が可能になり、「物化の呪縛」から解放されるはずなのだが、彼はその試みを疑問視し、次のように述べている。

思考、つまり「絶対的根源という存在領域」としての意識は、学問的理想の優位のもとで、すべての先入見とすべての理論的付加物から純化された純粋な研究テーマとして扱われる。しかしこれによって思考は、本質や可能性に関して、まずその思考に由来するとされるものへと凝固してしまう。思考は、思考〔それ自体〕から「観察される」ことで、客観的に存在する要素とそのような客観性を受動的に記録する要素へと分解される。すなわち、諸学問から借りてきた現象学的記述という形式は、見たところ思考に何も付加されていないが、この形式をつうじて思考はまさにそれ自身の中で変化している。思考は思考から追い払われる。そ

れは、自然的世界の還元にもかかわらず生じている、厳密に言うところの物化という事態である。すでに「論理絶対主義」の教説が、これにたいする原型である。(GS5. 55-56)

フッサールは純粹意識すなわち思考を基礎にして、学問の構築が可能だとみなすが、この学問は意識を主体としてだけでなく、対象として扱うことになる。アドルノは、そこに物化の問題を見ており、その原型を論理絶対主義に見ているのである。そこで次に、フッサールの論理絶対主義の見解を確認しつつ、考察を進めることにしよう。

2-2 フッサールの論理絶対主義

フッサールは自ら「論理絶対主義者」(Hua XVIII. 144) と称していた⁷⁾。これによって彼がおこなったのは、心理学主義にたいする論駁であった。彼によれば「心理学は事実学であり、したがって経験としての学問である」(Hua XVIII. 72)。そして彼によれば、心理学を基礎づける規則も、事後的経験に由来するがゆえに精密さを欠き、精密とされている自然法則に代えてそれを基礎づけるにしても、帰納的で蓋然的であり、結局は経験にもとづくあいまいな一般性を与えるに過ぎないものとされた (vgl., Hua XVIII. 72-73)。こうした心理学から彼が区別して提示するのが純粹な論理学の立場であった。彼によれば、論理学は論理法則に基礎づけられ、「絶対的な精密性」(Hua XVIII. 73) を持ち、そして「論理法則は明らかに真正なる法則であり、「たんに経験的な」すなわち偶然的な規則ではない」(ebd.)。そして論理法則は「すべてアプリアリに妥当するということが何よりも明らか」(Hua XVIII. 74) であり、「帰納によってではなく、必当的明証によって基礎づけと正当化を見出す」(ebd.) ものであった。このようにしてフッサールは論理学と心理学主義を、それぞれ異なる原理の法則にもとづくものとして区別するのとともに、後者を退けたのである。

このような論駁から見出されるのは、フッサールが事実と本質、あるいは心理学的なものと論理的なものを、たがいに原理の異なるものとして峻別しているという点である。フッサールが心理学主義を批判するのは、それが自然法則や経験的事実を前提としているからであった。これらの法則や事実の实在は素朴に定立されており、まさにフッサールの言う自然的態度によるものである。こうした態度が可能になる背景には、主観と客観がたがいに区別され二元論的に存立しているという、古くから想定される図式がある。したがってフッサールは、論理絶対主義をつうじて、従来の主観 - 客観図式を乗り越えようとしたと言えよう。

ところで、フッサールによる心理学的なものと論理的なものとの区別は、その後の態度変更や還元の理論へと展開されていた。そして彼は「絶対的根源という存在領域」(Hua III. 121)である純粹意識において、その志向的体験を分析していた。この分析にもとづいて、論理的なものもまた対象として分析された。論理的に形成されたもの、「反復される諸作用、同じ諸作用、あるいは似たような諸作用の中で形成される諸判断や諸推論など」(Hua XVII. 162)によって考えられたものは、「根源的明証」(ebd.)であり、「实在的な対象、空間的な対象ではなく、精神の非实在的な形成体である」(Hua XVII. 163)のであって、それは理念的な対象と呼ばれる。この論理的 - 理念的な対象は、意識の志向性において内在的に把握される。そしてこのことは、事実性や实在性からの区別によって、純粹意識の領野において可能なのである。

2 - 3 論理絶対主義のアポリア

さて、アドルノによれば、フッサールによる心理学主義批判にはアポリアが含まれている。ここでは論理絶対主義にたいするアドルノの主張を考察することにした。

フッサールにおいて、論理的なものはアプリアに妥当するとされ、「論

理学は思考の形式ではなく、現存する学問の形式」(GS5. 58)である。そして「フッサールの論理学の概念は、その制御機構として諸学問の存立を前提としており、しかも論理学自体にも、諸学問の体系におけるその領野が指定されている」(GS5. 58)のである。アドルノがこのように述べることからわかるのは、論理学が純粋性を保持するのは、心理学主義から区別されることをつうじてだけでなく、還元された思考からも独立して学問の形式となることをつうじてだ、という点である。つまり論理学は、思考の領野の中で扱われると同時に、思考から独立してもいることになる。そして論理学が思考から独立した対象だとしても、思考の領野、純粋意識の領野において示される。アドルノは次のように述べている。

あらゆる対象性を——学問の対象性も——意識内在へと批判的・観念論的に立ち戻って示すことは、学問の諸特権に抵触してはならない。純粋意識において見出されるものについてあらゆる学問に先行しておこなわれる分析は、純粋意識において見出されるもの自体を学問の対象として扱わなければならない。この逆説が現象学全体の鍵となる。(GS5. 59)

このような逆説が生じるのは、論理学がその純粋性を保持することに起因していると考えられる。論理学はそれ自体で完結し、他の何かによって生じることはない。また論理学は、不変の本質的なものを扱い、変動しうる事実的なものや経験的なものに左右されない。こうしたことは、心理学主義批判とも結びついている。その一方で、このような論理学を対象として扱う意識あるいは思考もまた、純粋であることがもとめられる。アドルノは、フッサールにおいては思考も論理学もともに純粋で絶対的であろうとするがゆえに、逆説的な事態が生じていると理解する。彼は次のように述べている。

あらゆる発生から独立し、これによって最終的にあらゆる存在者に妥当する絶対的論理学は、ふたつの解釈が可能である。〔ひとつには〕意識は論理学に、「理念的法則」に対置している〔という解釈である〕。意識が論理学の主張をそのまま想定するのでなく、基礎づけられたものとして示すつもりならば、論理法則は意識にとって洞察可能でなければならない。しかしその場合、思考は論理法則を思考自身の法則として、思考自身の本質として認識しなければならない。なぜならば、思考は論理的作用の総体だからである。純粹論理学と純粹思考はたがいに分離できないであろうし、論理学と意識との徹底的な二元論は廃棄されるであろうし、思考の主体は論理学の基礎づけの中にも入り込むことになるであろう。——あるいは〔もうひとつには〕フッサールは、純粹に絶対性を要求するために、思考に内在的で思考自身の本質である思考に見通されている形式として論理学を基礎づける、ということを放棄している〔という解釈である〕。しかしその場合、論理学は〔……〕意識にとってたんに「現象的に」与えられるにすぎず、「即自的に」明証でないことになるであろう。〔……〕だが同時に論理学は、論理絶対主義にとっても理念的純粹さにとっても不可侵な、無条件の妥当性という性格を失うことになる。(GS5. 80)

アドルノは一方で、思考にたいする論理学の独立を主張しようとすれば、思考への基礎づけに帰着することになり、他方で論理学を思考に基礎づけようとすれば、論理学の絶対性を揺るがしてしまうことになる、と理解している。それゆえ彼によれば、「絶対主義的主張のふたつの解釈は、反対の心理学主義の立場と同様にアポリアに陥る」(GS5. 81)と指摘するのである。

2-4 論理絶対主義における物化と物神崇拜

では、こうしたフッサールの論理絶対主義、そしてそれにたいするアドル

ノの批判を、さらに物象化論の観点から見た場合、どのような問題が見出されるであろうか。

フッサールは心理学主義批判をつうじて、自然的世界の素朴な定立を退け、純粹意識においてその志向的体験を分析した。彼の試みは、従来の伝統的な主観 - 客観図式を乗り越え、問いのあらたな可能性を開くものであった。この心理学主義においては、自然的な世界が可能になる根拠は示されておらず、暗黙の前提となっていた。心理学主義は、根拠もなく自然的な世界を定立し、それにもとづいて説明を試みていることになる。このように心理学主義は、根拠なきものを根拠とするという取り違えをおこなっており、その意味で一種の物神崇拜に陥っているのである。そしてこのことから、フッサールが論理絶対主義によって心理学主義を批判し、両者を峻別したということは、彼が物神崇拜批判をおこなっていたと理解することができるであろう。

ところが、本章の冒頭で引用したように、論理絶対主義においては「自然的世界の還元にもかかわらず」物化が生じている。しかもここで物化が指摘されるということは、その物的なものが自然的世界と同様に物神的性格を帯びている、ということの意味している。前節でアドルノがアポリアとして指摘したように、思考と論理学との関係を見たとき、論理学が思考から独立しているのか、あるいは思考にもとづくのか、という問題があった。それは見方を変えれば、論理的なものは一方で思考の対象であり、他方で思考においてあるものだ、ということである。この論理的なものは、事実的なものや実在的なものではなく、純粹意識あるいは思考において扱われるものであった。論理学が学問の形式として純粹性と絶対性を持つにしても、それは思考の過程において扱われ、思考においてとらえられるものであった。その意味で論理的なものは、対象化された思考であり、思考そのものでもあると言える。あるいはそれは思考過程の契機とも呼びうるであろう。論理的なものは、それ自体で純粹で絶対的だとしても、あくまで思考の一要素に過ぎない。た

だしそれは思考そのものと同一なのではなく、対象化されている。このようにアドルノは、思考の一要素である論理的なものが対象化される事態を物化と呼んだのである。

論理的なものがそもそも思考に含まれたものだとなれば、この物化によって思考は自ら分裂し、論理の対象を生み出していることになる。そしてこのことは、思考が物的要素を含むものだということも意味する。その一方で論理的对象は、それ自体で純粹で絶対的であるがゆえに思考ではなく、そこから独立している。対象は物化されたものだとはいえ、それがアプリオリに妥当するとみなされ、学問においてそれ自体で存在しているものとして前提となっている。アドルノによれば「フッサールの論理絶対主義は、学問そのものとその階層秩序を即自存在するものだ」と誤認するという諸学問の物神化を、その学問自体の基礎づけの中へと反映させている」(GS5. 58-59)。ここには、思考に先行してすでに学問の存在が想定されている。そして論理的なものもまた、学問と同様にすでに存在していることになっている。こうして、フッサール自身によって退けられたはずの物神崇拜がふたたび登場することになる。そしてこれとともに、一度は心理学主義批判をつうじて乗り越えたはずの主観 - 客観図式が持ち込まれていることがわかるのである。

ここでふたたび物神崇拜への批判が登場したが、これについては注意が必要である。というのも、このふたつの物神崇拜批判は、まったく同件事態を指しているわけではないからである。前述のように、フッサールの論理絶対主義は心理学主義批判であった。それは事実と本質の峻別という彼の姿勢にもとづいており、それによって事実的なものを素朴に定立し、無批判に前提とすることを退けるものである。その意味で心理学主義批判は物神崇拜批判であった。その一方で論理絶対主義の主張は、事実的なものが排除された本質の領域においてある。この主張で扱われる論理的对象は、経験的事実と類比的に論じられるが、やはり事実的なものではない。それゆえ、アドルノが論理絶対主義に心理学主義と同じ物神崇拜の残滓を見ていると解釈される

のだとすれば、彼には誤解がある、あるいは事實的なものと本質的なものを混同している、さらには還元される前と後を混同しているということになるであろう。しかしながら、彼における物神崇拜の問題とは、事實的であれ本質的であれ、物的なものが無批判に前提とされ、しかもそれが根拠とみなされる点にある。事實的なものを退けた論理絶対主義においてさえも、論理的对象が物化された思考として生み出されると同時に、純粋な本質として素朴に前提とされている。もちろん、対象的なものそれ自体をフッサールが否定しているわけではなく、還元によって現象学としては、対象の真理を探究することが可能である。だがアドルノからすれば、それは対象の真理を主観的にとらえたことにしているに過ぎず、対象についてとらえきれていない面を見落としている、あるいは隠蔽していることになる。この見落としあるいは隠蔽を物という問題から指摘することによって、フッサールが批判し退けた心理学主義と同様に、物的なものの前提が、彼自身の主張に残されてしまっていることが露呈してくるのである。しかもこの前提の根拠には、純粋で絶対的であることと、思考に帰することとの間で揺れ動いている。その限りでこの根拠は定まっているとは言えない。したがって、アドルノの洞察したように、論理的对象は、実在物でないにしても、物化されかつ純粋で絶対的な本質として一種の物神なのである。そして論理絶対主義の主張には、やはり物神崇拜が見出される。その意味では、論理絶対主義の主張は不徹底に終わっているのである。このようにアドルノは、論理的对象という非実在的なものを取り上げることによって、実在的对象と同様の問題を論理絶対主義の主張の中に見出そうとしている。物化と物神崇拜は、対象となるものには実在であれ非実在であれともなっており、アドルノはフッサールの論理絶対主義に、それが意図しないかたちで含まれているということを明らかにしたのである。

3. 物象化論と〈非同一的なもの〉の思想

フッサールの論理絶対主義に含まれるアポリアから、アドルノはさらに問題を見出している。それは論理絶対主義が、結局のところ主観主義に留まっているのではないか、ということである。そしてこの問題には、物象化論だけでなく、同一性と非同一性をめぐる問題も関係してくる。これについて考察を進めたい。

3-1 主観主義と同一性思想への批判

論理絶対主義は主観主義に留まるのではないかという指摘は、そもそも現象学理解としてどれだけの妥当性を持っているのであろうか。つまり、こうした指摘をおこなうアドルノこそが、従来の伝統的な主観 - 客観図式にとらわれているのであって、それゆえこうした図式を乗り越えたとされる現象学にたいして、批判するに値しないのではないか、という疑問が生じてくるのである。たしかに、現象学が従来の図式にあてはまるものでないのだ、という立場からすれば、そのような疑問が生じてくるのは当然であろうし、その場合にはアドルノの見解そのものが批判として成立していないことになるであろう。しかしながら、アドルノの観点が従来の図式に本当にとらわれているかと言えば、かならずしもそうではない。議論の出発点として、そのような図式を設定することがあるにせよ、後述するように、彼の主張はその図式を超え出てゆくからである。それでもなお、彼の主張にそのような図式があると認めたとしても、今度はフッサールの主張に同じ図式が含まれているのではないかと疑問を投げ返すことも可能であろう。論理絶対主義における思考の物化によって、思考の中に主観と客観というふたつの極が形成されているからである。実際にフッサールは、論理的なものを思考から独立した純粹で絶対的な本質として想定していた。だがその一方で彼は、論理的なものを対象として思考において内在的に把握しようとした。これは思考と論理

的対象との対立を主観主義的に解消しているということになるであろうし、これによって論理絶対主義を主観一元論だと呼ぶことも可能になるであろう。この場合、論理的対象は物化された思考であるのだから、思考も論理的対象とともに同一の思考として一致することになる。したがって論理絶対主義とは、主観一元論であるのとともに、一種の $\dot{\cdot}$ 同一性思想だと呼ぶこともできるのである。

その一方でアドルノの思想に沿って見方を変えれば、物化された思考、論理的なものは対象として思考そのものとは違うのだ、という理解も可能である。これは思考と論理的対象との $\dot{\cdot}$ 非同一性、思考と物化された思考との $\dot{\cdot}$ 非同一性があることを意味する。それゆえ論理絶対主義の主張には、思考と対象との同一性と非同一性がともにあることになる。だが論理絶対主義としての現象学の側からすれば、従来の主観 - 客観という図式は乗り越えられており、そもそもこうしたこと自体が問題とはならないであろう。しかしながらアドルノは、論理絶対主義に同一性と非同一性の問題があるとみなしている。彼は次のように述べている。

フッサールは論理学の物化をわかっており、だから、彼の方法全体に特有なことだが、この物化を「受け入れ hinnehmen」、論理学によって忘却されたものをもう一度意図的に忘却するのである。(GS5. 72)

フッサールの立場にしたがうならば、論理的対象は実在的な「物」ではない。それゆえアドルノが「物化」と指摘する事態は、フッサールにとってはすでに心理学主義批判において乗り越えられており、論理的対象が扱われる本質の領域にはあてはまらないはずである。しかしアドルノからすれば、論理的対象は実在物でないとしても、やはり物性を持ったもの、つまり「物」なのである。しかもそれは物化された思考である。ところがフッサールは物化された思考を、思考から独立した純粹で絶対的な本質として位置づける。それ

はまるで物化された思考が思考とは無関係であるかのようなのである。フッサールは論理絶対主義において、思考そのものとは異なる対象性が含まれていること、論理的对象と思考との非同一性があることはわかっているはずである。ところがフッサールはその非同一性も物化も存在しないかのように論じている。論理絶対主義は、物化によって生じた非同一性を忘れ去り、思考と対象との同一性を成立させているが、それによって非同一性がなくなってしまうわけではない。論理絶対主義はそれを承知の上で、やはり同一性を成立させようとする。アドルノの言う「忘却されたもの」は、まさに物化されたもの、物的なものであり、「意図的に忘却する」ことも、まさに同一化を指すのである。しかもそれは論理的对象の対象性を捨象することによって、事実上強制的に成立している同一性なのである。アドルノにとって論理絶対主義は、自ら生み出した非同一性を隠蔽する徹底的な同一性思想であり、自ら非同一性を生み出しながら同一化しているような主張なのである。さらに彼によれば、「論理絶対主義は、それを気づくことなく、最初から絶対的観念論である」(GS5. 74)とされる。アドルノから見れば、フッサールの一連の主張において、主観主義が揺らぐことはない。だがフッサール自身は、事実的なものの素朴な定立を退けて、自らの立場を超越論主義に位置づけることによって、観念論か否かという議論の枠組みにない⁸⁾。しかしアドルノは、そのようなフッサールの立場の中に、主観主義的で観念論的な性格が内包されていることを指摘しているのである。

3-2 非同一性と疎外

以上のように、論理絶対主義は主観主義的性格を帯びた徹底した同一性思想として理解されるが、同時に別の側面もあらわにしている。つまり同一性を徹底させたことによって、論理絶対主義の主張からは、隠れていた非同一性、忘却されている物的なものが露呈しているのである。この物的なものは、そもそも物化された思考であった。それは思考との同一性を保持するが、物

的である限りは思考に対抗し続けるものである。それゆえ物的なものは、同一化によってもなお思考にとってよそよそしいものであり続ける。論理絶対主義には、こうした疎外という事態が含まれており、物的なものは疎外されたものとして露呈してくるのである。このことは物化された思考との疎外であるだけでなく、物的なもの、対象的なものとの疎外であることも意味する⁹⁾。それをアドルノは次のように述べている。

思考の自己疎外としての論理学の物化は、等価物あるいは模範像として、思考が関係するものの物化、つまり諸客観の統一の物化をとまっている。その諸客観は、それらにはたらきかける思考にとって、変転する内容を度外視して統一というたんなる形式だけを保持するという仕方、同一性へと凝固してしまっている。(GS5. 76)

論理的なものは物化された思考であり、その起源は思考そのものにもとめられる。だが同時にそれは対象的なものとして思考そのものからは区別される。その意味で、物化によって非同一性、疎外が帰結していることがわかる。アドルノによればこの非同一性は、客観的なもの全般においても同様の帰結として生じうる。客観が疎外されたものとして生じてくるということによって、次のようなことが明らかになる。すなわち一方で、これまで示されたように、客観は主観から物化されたものとして主観と同一的なものであると同時に、疎外されたものでもあるという二重の意味を持ったものだということである。そして他方で、客観はそれ自体で、主観との関係において存立するものであると同時に、主観から疎外されたものとして、認識されえないものかだという二重の意味を持ったものだということである。したがってここでは、客観が疎外されたものとして同一化されえないものであるのとともに、その同一化されえないものとしての何らかの固有なものだ、ということが浮き彫りになってくるのである。

3-3 疎外と宥和

さて、論理絶対主義においては、その意図に反して、物的なもの、物化されたものとしての客観が、疎外されたものとして顕在化してくる。もちろんフッサールはそれを主観主義的に解消して、同一性を成立させようとする。アドルノは次のように述べている。

論理絶対主義には次のふたつがある。ひとつは、主観によって遂行された物化が主観において反省され、結局主観が自分自身にとって物となることである。もうひとつは、どのような力を発揮しても、無力とまではないにせよ恣意だと自ら嫌疑をかける主観を、端的に還元不可能なものによって阻止するという全般的な主観化の呪縛を打破する試みである。徹底化された主観主義は、自分で克服したという幻像 *Phantasma* になる。(GS5. 76)

フッサールの論理絶対主義は、物的なものを忘却し、疎外を隠蔽するに留まる。これによって実現する主観主義は同一性の幻像に過ぎない。しかしながらその一方で、このように物化が自覚され、疎外が露呈してくることによって、「主観化の呪縛を打破する」契機が生まれることにもなる。ではこの打破はどのようにして可能なのであろうか。それは、疎外の問題にたいしてどのように向き合うかということに帰着するであろう。アドルノによれば、フッサールの場合に論理絶対主義の主張は「思考による構成的な媒介なしには、言うところの理念的諸法則なるものも実在的なものに適用することができないであろうし、理念的存在は実在的存在とその「形式」ですら関係することはないであろう」(GS5. 78) とされる。それゆえ「真理についての思考は、たとえ超越論的であれ、主観においても純粋な理念的法則性においても汲み尽くしえない」(ebd.) ものである。そして「まさに真理の客観性は主観を必要とするのであって、主観から引き離されてしまうなら、真理の客観性

はたんなる主観性の餌食になる」(ebd.) ことになる。こうしてフッサール自身による「主観化の呪縛を打破する」試みが失敗しているとみなしながら、アドルノは次のように述べている。

経験的で偶然的な主観か、あるいはあらゆる事実性から純化された、絶対的に必然的な理念的法則か、フッサールはもっぱらこの硬直した二者択一だけを見ている。すなわち真理は主観においても純粋な理念的法則においても解消されず、真理はそれらの契機の星座 *Konstellation* であり、この星座は、「残余」として主観の側や客観の側に算入することができないものである。(GS5. 78-79)

ここでアドルノが指摘するように、フッサールの主張には二者択一の構造が想定されている。これについては、「もちろん〔心理学的〕人格は、この論理法則に直接威力を及ぼすことはできない」(GS5. 79) ののだと、フッサールと同様アドルノも理解を示している。だが「論理法則は、心理物理的な個体を超え出た主観性の概念によって媒介されており、その際、これらの個体を単純に抹消するのではなく、自分の基づけの契機として自分の中に保持する」(ebd.) とされる。こうした論理法則を、フッサールは主観性と対置させている。これにたいしてアドルノは、それらの媒介関係に注目し、フッサールの主張に代わるものとして星座を提示する。アドルノにとって「真理はたんなる主観的な構造の事実性によっても、理念性〔……〕によっても証明されえない」(ebd.) のである。ここでアドルノは、二者択一でも無批判な並置でもない、星座を導入することで、フッサールとは異なる方途を示そうとしている。ところがフッサールは「真理を存在者として——フッサールはそれを「存在」と呼ぶ——釘づけにしてしまう」(ebd.)。だがアドルノにとって「むしろ真理とは力場 *Kraftfeld*」(ebd.) であって¹⁰⁾、フッサールのように実体化されるものではないのである。

ところがやはりフッサールは、他のいわゆる「第一哲学」と同様に、「実際にそれ自体において敵対的である全体を宥和させようと試みる」(GS5. 89)のであって、そのために「存在を意識に還元することによって対自的に処理しようとする」(ebd.)。その際「宥和とは、いっさいを自分と等しくすることを意味する」(ebd.) のであり、アドルノはそれを「支配」と呼んでいる。この支配を引き起こす契機となるものとして、彼は偶然性を挙げている。これについて彼は次のように述べている。

支配と同じでないもの、つまりもっとも弱々しく異種的なもの、それを支配は偶然として包摂する。偶然的であるものを人は支配することができない。どんな場所でもおかまいなしに突如生じる偶然性は、精神の全面支配の嘘、精神と素材の同一性の嘘を暴露する。(GS5. 89-90)

偶然性は同一化の意図に応じるものではなく、むしろそれに反して主観的でないものの側から示されてくる。アドルノは支配と偶然性との間の非同一性を指摘しているが、この偶然性が、彼の言う〈非同一的なもの〉のひとつとして理解することができるのである。こうしてフッサールがおこなうように、「主観が見境なく同一性に固執すればするほど、そして自分の支配をより純粋に強固なものにしようとするほど、いっそう非同一性の影が大きくなる」(GS5. 90) ことになる。偶然的なものが主観にとって〈非同一的なもの〉として顕在化し、フッサールによる宥和の試みは、その敵対性と疎外をますます激化させるのである。そしてアドルノによれば、偶然性を含む「世界内的なものの排除は、おなじみのデカルトの図式にしたがって自我に行き着くが、この自我の意識内容は、直接的に確実なものとして、端的に受け取られるべきだとされる」(GS5. 93)。その一方で「思考の統一を構成している自我は、それ自体でまさに、論理的な思考形式の純粋性を保つためには排除されなければならない世界に属している」(ebd.)。フッサール自身も「世

界自体なるものは存在せず、われわれにとっての世界、あるいは何らかの偶然的な種に属する存在にとっての世界だけがある」(Hua XVIII. 128)と述べているが、アドルノによれば、「論理絶対主義が世界を犠牲として捧げようとする客観性の概念は、そもそも客観性のモデルとしている概念、つまり客観の概念、世界という概念を放棄するわけにはいかない」(GS5. 95)のである。客観的なものは、もちろん主観の外部に即自的に実在するものを指すわけではない。またそれは主観が生み出した所産に留まるのでもない。それは物化という主観との関係を持ちながら、主観とは疎遠なものとして顕在化してくるものである¹¹⁾。フッサールの現象学は、その意図に反して矛盾を含むものであったが、その一方でその矛盾が呪縛の打破の契機となるものであった。そしてこのことが、アドルノの物象化論という観点から示されたのである。

おわりに

アドルノはフッサールの論理絶対主義について、一方で物神崇拜批判として肯定的に評価しているが、他方でアポリアをかかえていると指摘した。このアポリアにおいては、フッサールが一度は退けたはずの物神崇拜が残されており、論理的なものという非実在の対象であっても同様の構造を持っていることが明らかにされた。アドルノによれば、論理絶対主義に含まれるアポリアは、主観主義的に解消されている。それは論理絶対主義が同一性思想であることによって成り立っている。だがこれと同時にアドルノは、論理絶対主義の中に非同一性、疎外が含まれていることを指摘した。フッサールはそれをやはり主観主義的に宥和へともたらそうとする一方で、アドルノはこの疎外状態そのものにおいて宥和の可能性をもとめたのである。

アドルノの物象化論は、物化にともなう物神崇拜、およびそれによって生じる疎外を問うものである。この物化においては、疎外されたものの敵対

や拮抗が露呈した。この疎外されたものこそが、アドルノにおける〈非同一的なもの〉のひとつとして理解することができる。これは主観にとってはよそよそしく、同一化に対抗し、そこから逃れるものである。それゆえ彼の物象化論とは、この〈非同一的なもの〉としての疎外されたものが顕在化してくる場面を問うていたと言えよう。では、アドルノがフッサールの主張にたいして物象化論の立場から理解し、批判したということは、どのような意味を持つのであろうか。言い換えれば、なぜアドルノがフッサールの主張に物性を見出し、物の問題として考えたのであろうか。アドルノは物の概念に両義性を見ていた。それは一方で超越としての意味であり、物の即自性や認識の限界状況を示すものとして用いられている。フッサールの主張に物の問題が生じるということは、現象学の方法、意識の志向的体験の分析が不徹底に終わっていることを示唆している。他方で物は、意識に与えられる以上の意味を持ったものとして理解される。それは認識の限界において、方法の不徹底によってはじめて顕在化されてくるものである。それはまさに、現象学がもとめる「事象そのもの」を示してくることになる。アドルノが物の問題から現象学を理解しようとしたということは、「事象そのもの」を現象学とともに、あるいは現象学以上にもとめようとしたということを意味するであろう。そしてこうしたアドルノの取り組みが、彼の〈非同一的なもの〉の思想の一端を示している。以上のように、アドルノの論理絶対主義批判をつうじて、彼の物象化論が示されただけでなく、これによって彼の現象学研究や〈非同一的なもの〉の思想の一側面もまた示されたのである。

* 本稿は、日本学術振興会科学研究費 JP17K20193 による研究成果の一部である。

註

- 1) Theodor W. Adorno, Kritik des logischen Absolutismus. In: *Archiv für Philosophie*. 5 (2), Stuttgart 1954, S.130-169.

- 2) 執筆時の草稿は3種類残されている (in: Theodor W. Adorno Archiv. Ts28364-28440)。このうち、1954年1月25日以前に執筆されたとされる草稿 (以下「初稿」と表記) は、タイプ原稿に手書きの修正が施されている。残りのふたつは1月25日以降に書かれたもの (以下「修正稿」と表記) で、どちらも「初稿」の修正が反映された同一のタイプ原稿である。ふたつの「修正稿」には、手書き修正の内容に差異がある。雑誌掲載時には、「修正稿」からさらに加筆と修正が加えられており、「初稿」で削除された文章が復活している箇所も散見される。
- 3) アドルノの物象化論が形成される上で直接的な影響があったと考えられるのは、G・ルカーチの物象化論である。アドルノが若い時期からルカーチの作品に親しんできたことは、すでによく知られている。Vgl., Martin Jay, *The dialectical imagination. A history of the Frankfurt School and the Institute of Social Research, 1923-1950*. Boston, 1973 and Adorno. London, 1984. Rolf Wiggershaus, *Theodor W. Adorno*. München, 1987. 西角純志「ルカーチとフランクフルト学派〈物象化〉のアレゴリーと批判的意識」(『情況 第三期』4巻10号、2003年、182-197頁)、「アドルノにおける物象化」(『季報唯物論研究』132号、2015年、58-67頁)。
- 4) 一般に疎外論と物象化論との関係という古典的な論争がある。たとえば廣松渉『資本論を——物象化論を視軸として——読む』(岩波書店、1986年)をめぐる論争を知られている。だがアドルノの場合、両者の間に明確な区別や断絶は認められない。それゆえ本稿では両者を大きなひとつの問題とみなし、それを物象化論と呼ぶことにする。
- 5) なお、ここで「物化論」ではなく「物象化論」としたのは、意味上の問題というよりは、研究動向全般に普及している後者を表現として採用したからである。少なくとも、アドルノにおいて「物化」と「物象化」と訳し分けなければならない意味上の差異は認められない。アドルノは *Verdinglichung* を物 Ding と結びつけていることは間違いなく、また物として現象する (意識の中に現れる) だけでなく、意識から離れて疎遠になる事態も意味していることから、ここでは「物化」という表現を採用した。ただし、「物象化論」という表現が広く普及している点を鑑みて、本稿では「物化」と「物象化論」という区別が生じている。
- 6) これについては拙稿「アドルノとライル ——イギリス滞在期間におけるアドルノの現象学研究と分析哲学との接点」(『立命館大学人文化学研究所紀要』107号、2016年、131-156頁)を参照。
- 7) これについてはアドルノも指摘している (vgl., GS5. 77)。
- 8) これについては拙稿「観念論と反観念論 ——亡命期間におけるアドルノの現象学研究と観念論をめぐる問題」(『立命館大学人文化学研究所紀要』114号、2018年、125-147頁)を参照。またフッサールの超越論主義と事実的なものとの関係については、本項の内容とも関連してくる問題である。ここにはアドルノとフッサールとの観点の

相違があり、より詳細な検証が必要である。たとえばフッサールが峻別するような事実と本質との関係を、アドルノはあえて混同させて論じている。それはフッサールがどのような区別をおこなうにしても、アドルノからすれば首尾一貫した観点と枠組みで論じているように映るのである。こうした問題については、稿を改めて論じたい。

- 9) マルクスの場合、労働生産物の疎外と労働の疎外がそれに該当する。
- 10) 「力の場」については、M・ジェイの指摘がよく知られている。ここでアドルノは、前述の星座と同じような意味合いで用いている。
- 11) マルクスやルカーチらの場合、疎外は解消されるべきものであり、この疎外のなくなることが宥和だとされた。これにたいしてアドルノは、疎外をそのままでよいとは考えていなかったにせよ、そこに生じる矛盾や敵対関係を重視し、この疎外の過程そのものに宥和の可能性を見出そうとする。それが彼においては端的に、星座や力の場という言葉として表現されるのである。

凡例

本文中の〈 〉は意味のまとまりを表示したもの、()は補足表示である。

引用文中の〔 〕は、訳出に際して補足したものである。

引用文は拙訳であるが、邦訳があれば適宜参照している。

人名については、敬称を省略している。

文献および文中略号

Theodor W. Adorno, *Gesammelte Schriften*. 20 Bände, hrsg. von Rolf Tiedemann, Frankfurt am Main, 1970-1986 (GS と略記、全集版の巻数と頁数を表記)

Edmund Husserl, *Gesammelte Werke*. Haag, 1950ff. (Hua と略記、全集版の巻数と頁数を表記)

Rolf Wiggershaus, *Die Frankfurter Schule. Geschichte, theoretische Entwicklung, politische Bedeutung*. München 1986

Richard Klein, Johann Kreuzer, Stefan Müller-Doohm (hrsg.), *Adorno Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*. Stuttgart 2011

Stephen Eric Bronner, *Critical Theory. A very short introduction*. Oxford, 2011.

János Weiss, *Verdinglichung und Subjektivierung. Versuch einer Reaktualisierung der kritischen Theorie*. Frankfurt am Main, 2015.

Peter E. Gordon, *Adorno and Existence*. Cambridge 2016